

「旅絵師—制作日記より—」

(36)

春陽会会員 中川一政

窓一杯に吉野の桜が咲いてゐる。その隣の杉の老樹は、峯をつらぬき、梢こずえから、長い、長い雨が今朝から降りつづいてゐる。

背景の龍爪山は煙つて、梅林は若緑の芽をふいてきた。

◇

起きたら雨であつた。仕事に疲れるより、仕事を休むことで疲れてしまふ。私のやつてゐるやうな風景写生は、日にちの無駄が多く出かける時は、いつもそれを勘定にいれないだけ、多いやうな気がする。来てみればいろいろな障害にあふ。雨の外に今年も風にも脅おびやかされた。

風速二十^ノの風といふと相当なものだ。こんな風は、山の陰のどんな岩穴の中でも見つけて吹きまくるから、画架の立て場はもとよりない。海岸にさしかかる街道の乗合自動車の背中が浪なみをかぶる。

さういふ風が吹く時は、仕事を休むから障害はない。天気晴朗である時に、少し吹く風が障害を与へる。大抵風の方向をみて、画架の足を石に結んでおくのだが、どうしても倒れないと、風はこんどはこつそり後ろにまはつて不意を食はず。

そのため、私は画架を折り、私の友達は画布を岩の上に転がされてやぶ

られた。

三月にはいつて、西風が吹かなくなつて、伊豆の海岸は、海の上にも霞が立つ。沖には霞を透して赤石山脈が見える。

◇

私の宿は、海岸から離れた山寺の二階である。その山寺の入口に繚乱と櫻の花がさいてゐるのである。椿の花から、飛び移つたヒヨドリが、姿態を傾けて、花の枝を動かしてゐる。

その下に傘をさして、参詣の人が朝からある。山に不動堂がある。花の盛りを見に来るのかと思つてゐると、けふは不動様の命日ださうだ。

この前の雨の日、友達と二人で、画面をならべて、画面に重くついた絵具を削つてゐるところへ、老和尚がきて眺めてゐたが、削つた絵具を惜しがつて、その使ひ道がないかしらと言つた。

そしてその翌朝、不動さんの高麗狗こまいぬを塗つてくれまいかと言つた。

頼まれて友達は、和尚の無邪気な依頼を断ることもできず、ごまかすこともできず、百尺竿頭一步(*1)を進める決心をして、不動堂にけふは登つていつた。

(*1 百尺竿頭一步…既に頂点に達している上に、さらに尽力する。)

私はけふも画面をとり出して、手を入れたり、ナイフで相変らず絵具を削つたりしてゐる。

けふ雨が降つたら、展覧会に間にあはないかも知れない。けふあたりが、

できるかできないかの境目に立つてゐる。(*2)

西の窓にまはつてみると、海の色は、明るい空をうつしてゐるやうだ。西の方が晴れ、西風になれば晴れるのである。

私は下駄をつつかけて、水音の急に高くなつた溪を渡つて、不動さまの石階を登つていった。大量の額や、出征の額のかかつてゐるお堂の中へ、高麗狗を持ちこんで、友達はエナメルを塗つてゐる。

胴を黄色くし、紺青^{コバルト}、緑青^{エメラルド}で頭と宝珠玉を塗つたらどうだらう。

老和尚も寺の家族も、皆眼を一对の高麗狗にあつめてゐる。

牝狗が撫でてゐる子狗は、小さいながら、眼玉も牙も、一通りできて、塗りわけける面倒な夕方になつてきてゐる。

この不動さまは、この漁村の信仰を一身に集めてゐる。この村から七十人の出征兵士が出てゐて、一人戦死しただけださうだ。

戦死しないだけではだめだ。ところが不動さま。この二人の画家にも手柄をたて、勲功をたてさせたまへ。

〔名古屋新聞〕 昭和十三年四月二十七日付

(*2)

第十六回春陽会展 中川一政出品作品
《入江風景一》、《入江風景二》

